



新春 スペシャルインタビュー

海洋冒険家・ヨットマン

堀江 謙一

昨年6月にヨット単独無寄港での太平洋横断に成功。最年少での太平洋横断から60年、世界最高齢の83歳で偉業となる航海を成し遂げた海洋冒険家・堀江謙一さんに今回の冒険や新たな挑戦などについてのお話を伺いました。



コロナに翻弄 されつつ出港

60年前の初めての航海時には、最高齢で挑戦することなど全く考えていませんでしたが、航海を続けている間に100歳までは続けられたらいいなと思うようになりました。100歳まで待とうかとも考えましたが、80歳を超えてもまだまだ元気なのに何もしないのはもったいないと思い、今回の挑戦を決めました。本当は2021年に挑戦するつもりでしたがコロナ禍ということもあって、なかなか準備を進めることができず2022年になりました。おかげさまで「最年少での太平洋横断から60年」というキリのいいタイミングになりました(笑)。

今回のヨットは設計を横浜で、造船を広島で行いました。コロナ禍で神経質になっている時期でしたので、会って打ち合わせをすることができませんでした。またサンフランシスコから出発する72時間前にコロナの陰性証明書も提出する必要があり、直前まで航海に出られるかわかりませんでした。航海に出れば一人なので感染の心配はありませんが規則ですからクリアする必要がありました。



航海中は 無意識でも集中

航海中の生活は、日が昇ったら起きて、日が沈んだら休むという太陽中心の生活を送ります。食事もし日が出ている間にとり、日が沈むと基本的には食べません。お腹がすいた時は果物のような調理しないで食べられるものを食べていました。

ヨットはだいたい時速7、8kmで進みます。ヨットにあたる波の音で順調に進んでいるかわかります。寝ているときにも、半分寝ぼけながら波の音や船体の揺れを感じています。無意識でもずっと集中しているので神経を使いません。毎日の衛星電話の交信も、待ち構えていないと取り損ねることがあり大変でした。着信音が波の音にまぎれてしまうこともありました。

それでもヨットに乗っているのは楽しいです。ヨットを操縦していると、「ここをこうしたらよかった」「ああしたらよかった」と反省点に気づき、「次はこうしよう」と勝手に次のヨットの夢を描いていました。航海を計画している時も、ヨットを建造している時もワクワクしていました。ずっとワクワクしっぱなしの2年間の挑戦でした。



アベレージで 進んでいたらいい

60年前の航海では北寄りのルートをとりましたが、今回の航海のルートは南寄りをとりました。このコースは貿易風帯が中心となります。貿易風は安定している東風でヨットにとっては理想的で最上級の風です。今回もよ

く風が吹いてくれ、思った以上に順調に進みましたが、航海中には天気の悪い日や後退した時もありました。衛星通信を利用したトラッキングシステムで1時間ごとの現在地が地図に表示され、ホームページで見ることができたので、よく見てくれている人の中には「後退しているけど大丈夫か」と妻に連絡をくれた人もいました(笑)。気持ちは一緒に航海してくれていたんですね。

ヨットは1日に200kmくらい進むので、1時間後退していても24時間では進んでいます。進む日もあれば、進まない日もあります。それでもアベレージで進んでいたらいいと思っていました。



自然に溶け込む ことがコツ

ヨットを始めたきっかけは68年前に関西大学第一高等学校に入学し、ヨット部に入ったことです。まだ終戦から9年しか経っておらず、日本が復興している時期でした。そんな時代にヨットをしている人はほとんどいませんでした。ヨット部に入っていなければ今日のヨット人生はなかったでしょうから、この出会いは私にとって幸運でした。

ヨットと他のスポーツとの一番の違いは、動力源です。私も中学生のころは体操をやっていましたが、動力源は自分の体です。一方、ヨットの動力源は風です。風の力をいかにうまく使うのが重要で、自分のエネルギーは操縦に使うだけです。筋力や肺活量をあまり必要としないことが幅広い年齢の人が楽しめる要因でしょう。

ただ、相手は自然ですからなかなか思うよう